

知ることができる（この重点領域研究については、中嶋嶺雄編『東アジア比較研究』、学振新書、1992年、参照）。

これらの学術交流をさらに引き継いだのは、文部省科学研究費国際学術研究であり、いずれも私が研究代表者となって、「現代中国の政治的社会的変動に関する日仏共同研究」（1992～94年度）、「中国・台湾・香港の社会経済的変動に関する日仏共同研究」（1995～96年度）、「東アジア諸地域の社会変動に関する日仏共同研究」（1997～99年度）としておこなわれた。この間、フランス側参加者がしばしば訪日する一方、とくにこの8年間は、日仏共同研究パリ会議が毎年開催され、中国やアジアの変化を直視した熱心な討論がたたかわされた。フランス側からはジャン＝ピエール・キャベスタン（CNRS上級研究員）、フランソワ・ジプルー（同）、マリー・ホルツマン女史（評論家）らの中堅研究者も加わり、日本側の常連メンバーは、中兼和津次（東大教授）、蒲地典子（米ミシガン大教授）、小島朋之（慶大教授）、国分良成（同）、宇佐美滋（日大教授）、光田明正（桜美林大教授）、園田茂人（中大教授）、井尻秀憲（東外大教授）、渋谷司（拓大講師）、興梠一郎（神田外語大講師）の諸氏であった。会議では、英語を共通語として討論するのだが、回を重ねていると、ときには聴き取りにくいフランス訛りの英語にも慣れ、お互いの意見もわかってきて、激しい論争が

あっても学びあえる点が多い。

アメリカの研究動向がとかく米中関係などの現実に影響されやすく、またしばしば政策志向型であるのにたいし、中国学（sinologie）の永い蓄積をもつフランスの場合は、より歴史実証的であり、また社会学の学問的な伝統が活きているように思われる。そういえば、この間、パリで私が常宿にしてきたホテル・サンジェルマン・デ・プレは社会学の祖といわれたオーギュスト・コントがかつて住んでいたところであり、壁にはそのレリーフが嵌め込まれている。

いずれにせよ、私たちの日仏学術交流は、多くの方々のご協力によって一定の成果を産むことができた。おそらく社会科学分野では唯一の日仏間の長期交流だといってもよいであろう。しかし、いずれの物事にも終りがあるのであって、やはりこのあたりで締めくくるのがよいのではないかと私は考えていた。パリのホテルで催された最後の会食会には、かつて共同研究のメンバーの一人であった小倉和夫駐仏大使夫妻も着任2日目だということに出席して下さった。私が終りの挨拶と謝辞を述べたとき、フランス側参加者の眼が潤んでいたと聞いて、私なりの楽しい苦勞が報われた思いであった。

なかじま・みねお
東京外国語大学長

学術月報

Japanese Scientific Monthly

Vol. 53 No. 3 通巻第 664 号

巻頭言：日仏学術交流を終えて——中 嶋 嶺 雄

特集：高度プロセス

総論—高度プロセス—新世紀にむけた物質科学の潮流—野 依 良 治
環境調和型触媒プロセス——村 橋 俊 一
未来型不斉反応プロセス

—触媒の不斉炭素-炭素結合生成反応— 林 民 夫
整合的化学プロセス：グリーンケミストリーへの挑戦—大 寺 純 蔵
高選択的有機合成プロセス——今 本 恒 雄
原子クラスターの特異な振舞いと材料設計——森 博太郎

新炭素質物質創製プロセス—21世紀に広がる新炭素ナノ物質—
篠 原 久 典
コンバージョンプロセスと材料——山 本 嘉 則

ヘテロ原子の特性を活用する有機高機能物質の創製と合成法の開拓：
有機合成反応の効率化——中 井 武
官能基化C₆₀の創製と新機能開発

—サッカーボール分子をどのように使いこなすか—
西 郷 和 彦
高度に組織化された分子集合とその機能——柴 崎 正 勝

未来開拓学術研究推進事業に参加して
化学の新たな展開を目指して——池 田 宏
スカンジウム：フラーレン研究における魔法の金属—王 春 儒

特別寄稿：我が国の大学の論文数と引用数
—ISI引用統計データベースによる統計調査—
——根岸正光，孫 媛，山下泰弘，西澤正己，柿沼澄男

先端研究みてある記：超高エネルギーガンマ線で宇宙を探る
—東京大学宇宙線研究所のカンガルー計画— ——菊 池 健
師を語る：自らの美学に殉じた小林凡郎先生——宇 井 理 生

散歩道：民族大移動と大学改革——北 澤 宏 一

2000 **3**

日本学術振興会